九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 若き日の思い出 ： 文化人類学への志向

松永, 和人
福岡大学人文学部 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2338946

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.4-6, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

# 若き日の思い出―文化人類学への志向―

松永　和人

私は、旧制中学校2年生のときに終戦を迎え、その後、激動の時代に、青年期を送った。

旧制中学校から新制高等学校へと、学校制度が転換したのみならず、当時、価値観、文化の激変に直面したのであった。

それまでの価値観は完全に否定され、新しい価値観には、ことごとく、戸惑うことばかりであった。

身近な経験として、それまでの男女別学が男女共学となり、従来の滅私奉公の軍国主義的全体主義の価値観から個人中心主義の民主主義的価値観へと激変したのであった。

今、ふりかえると、当時、それまで知ることのなかった新しい価値観・新しい文化を戸惑いながら学んだ経験が、異文化を学ぶいわゆる比較文化研究への志向、文化人類学への志向を自覚する基礎になっているような気がしてならない。

終戦まで、いわゆる軍国主義的全体主義の下、滅私奉公の価値観を説かれていた先生が、終戦を転機として、全く逆の価値観を説かれることになったことには、今考えても、複雑な思いをするのであるが、それまでの教育への深い反省から、新しい価値観を広めるための教育の重要性を熱心に説かれたことに、当時、今後の進路を考えはじめていた高校生として、大いに、啓発されたのであった。

今思うに、私は、その啓発に応じて、教育への道を進む決意をしたようである。

終戦直後のこと故、国全体もそうであったが、私自身、きびしい経済的条件の下、下宿、間借りする余裕などあるはずがなく、汽車通学するには少々無理な距離であったが、なんとか自宅通学することのできる佐賀大学の教育学部に入学したのであった。

ところが、その頃お世話になった先生には大変申し訳ないことを述べることになるが、小・中学校の教師養成という学部の性格上、当然のことなのかもしれないが、教材をいかに効果的に教えるかといういわゆる教育技術を学ぶことが中心で、文化を学ぶことにはほど遠かった。

汽車通学も、当時、現在では想像もできないほどの劣悪な状態で、貨物車に人の乗る車を連結した列車が多く、しかも、のろのろ運転で、家に帰りつくのが、夜10時ごろということもしばしばであった。

そのような中に、杉浦健一先生の『人類学』を知り、車内で、空腹に耐えながら、夢中で読んだことも、今なお、なつかしい思い出として、残っている。

その中に、新設された九州大学の教育学部、そして、教育学部付属の比較教育文化研究施設のことを知り、幸いにも、九州大学教育学部へ転入することができた。

その付属の研究施設が、比較教育研究施設でなく、比較教育文化研究施設であるということに、多大な関心を抱いたのである。

そのような九州大学の教育学部へ転入し、そこで、吉田禎吾先生にお会いしたことが、私のその後の進路を決定づけ、今日の私の基礎ないし出発点となっている。

吉田先生は、その付属の比較教育文化研究施設に所属なされ、文化人類学の講義その他をなさっておられ、毎週、先生の講義その他に出席することが待ち遠しいほどであった。

当初、学部で、文化人類学専攻の学生は、私一人であった。

数年後、現在、アフリカ研究に没頭している上田将君が現われ、また、大学院においては、今日、放送大学で活躍している江淵一公君が現われた。

その後は、かなりの学生が専攻し、また、教官としては、綾部恒雄先生が着任なされ、学部内で、他専攻の者がうらやましく思うほど、文化人類学の研究室は、隆盛を極めることとなった。

綾部先生にも、いろいろと、お世話になった。

文化人類学専攻の学生が私一人のときには、苦しい思いをしたことがあった。

というのも、伝統的な教育学の研究をなされている先生方の中には(全てではない)、必ずしも、文化人類学に理解を示していただけない先生もおられ、そのような先生からは、教育学を学び研究する学部をなんと心得ているのかといった実にきびしい言葉を頂戴することもしばしばであった。

伝統的な教育学専攻の先生のお気持ちがわからなくもなく、本当に、申しわけなく思っていた。

しかし、文化人類学を学びたい一心で、そのような言葉には、耐えていたのであった。

吉田先生には、本当に、お世話になった。

先生の研究室で、また、時には、喫茶店で、コーヒーをいただきながら、学生としての心構え、研究上の留意点など、実に、いろいろなことをお教えいただき、お導きいただいた。

その中、現在でも、なお、鮮明に記憶し、私の研究上の指針となったことを、二つ、記し、文化人類学を志す後輩の参考にしたい。

その一つは、フロンティア精神ということである。

その意味は、学問には、新しい研究分野を切り開くことが最も大切であることはいうまでもなく、まずもって、その意味であることではあるが、さらに、当時、先生が常日頃発しておられたお言葉から私なりに察していたことであるが、先生が福岡においでになるまでは、ここ福岡には、文化人類学の基盤はなんらなかった。

そのような中に、赴任なされ、自分は、この土地に、文化人類学の基盤を築くんだという意気込みをおっしゃっていたと受け止めていた。

事実、私には、その気迫がありありと伝わってきていた。

もう一つは、従来の説ないし従来の考えに反する事実を積極的に探せ、というお教えである。

このことも、いうまでもなく、実に、大切なことである。

そのことがなければ、学問の進歩は望めない。

その点に関する私の経験を記しておこう。

私は、そのことを心掛けていたことは事実であるが、しかし、偶然にも、そのことを実感したことがあった。

それは、私の研究生活の後半での研究テーマとした「左のシンボリズム」にかかわることである。

従来、わが国の文化において、神祭りに右、葬制に左がかかわるとする二元論が指摘されていた。

私は、わが国の文化についてのそのような右・左の象徴的二元論（symbolic dualism）の研究に取り組む前は、“peasant”の研究とのかかわりで、当時、文化人類学というよりも、どちらかといえば、農村社会学の分野に入る研究調査を福岡県南部の農村でおこなっていた。

その研究調査の中で、ムラの氏神に飾るシメ縄ナイに参加させてもらい、私自身、なれない手つきで、シメ縄を綯わせてもらっていたときのことであった。

ムラ人の一人が、神様のシメ縄を綯いながら、葬式の話をしてはならないが、と断りながらも、私に問われたことがあった。

それは、氏神に飾るシメ縄が左ナイであるとともに、かつて土葬であった頃の棺縄（棺をしばる縄。火葬となっている今日は、棺をしばることはしていない）が、また、同様に左ナイであったことをどのように理解したらよいのかという質問である。

つまり、従来の指摘のように、神祭りに右、葬制に左がかかわるというのでなく、その両者に、ともに、左の事実が見られるということに関する質問である。

そのムラでも、死のケガレ観の故に、死者が出た家の者は、一年間、氏神に参拝せず、境内に足を踏み入れないようにし、また、家の中では、神棚に白紙を張って、神が死者を見ないように、死者のケガレが神にかからないようにし、神祭りと葬式とはいわば反発する関係にある。

そのように、相互に反発する関係にあるのであれば、その両者に、右と左、あるいは、左と右がかかわっていそうであるのに、事実は、その両者に、ともに、左の事実が見られるのであった。

ムラ人は、そのことを不審なこととして、私に、その解釈を問われたのである。

私は、従来の指摘とは異なるその事実に、多大な関心を抱き、その後、そのムラで、さらに、各地のムラで、「左のシンボリズム」に関する研究調査をおこなってきたのであったが、どこの調査地ででも、従来の指摘とは異なって、神祭りと葬式に、ともに、左の事実が見られるのであった。

そのように、神祭りと葬式とにともに「左」の事実が見られることは、シメ縄と棺縄のほかにも知られるのであった。

このことには、最初、半信半疑といった気持ちを抱くほどであった。

率直にいって、従来の説に反した事実を、私が積極的に探したわけではない。いわば、偶然に知った事実であるが、そのことが、私の研究活動の後半を決定づけた。

以上のような経験から、吉田先生がいつもおっしゃっていた「従来の説とは異なる事実を積極的に探せ」というお教えがいかに大切であるかということを実感した次第である。

吉田先生のそのお教えをここに記し、そのお教えを心掛けておくことがいかに大切であるかということを、文化人類学を志す後輩に伝えておきたい。